九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

戦後日本における在日朝鮮人の分節と包摂（上）

趙，正民
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年

https://doi.org/10.15017/8458

出版情報：九大日文. 3, pp.97-109, 2003-10-31. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン：
権利関係：

戦後日本における在日朝鮮人の分節と包摂（上）

趙 正民 CHO Jung-min

＊

私は十四年間大阪で生活していた朝鮮人で、戦災で三箇月前京城へ疎開して来たものですが、親戚も見当たらず〇〇も慣れない土地故に今日の状態になりました。家族五人は着の身着のままで現在のやうに生活〇〇は〇〇に溢れてゐても金がなく家族は飢え死にを待つより外に途がありません。〇〇は次第に冬季に近づき実に心細い限りです。貴方方は日本人だけを援護なさる目的かも判りませんが、自分達のやうに国民学校から今日まで内地で育ち朝鮮語もはつきり出来ず、故に平和な日本に再度行く心算で居ります。どうかこの際日本人、朝鮮人の別なく斯くの如き事情で困り切つてゐる人々を援護するのが、〇〇〇であると共に大和民族独特の狭義心ではないでせうか。

朝鮮語も不自由であり、また日本での生活が長いゆえに「祖国」は「慣れない土地」になってしまったと告白するこの声は、一九四五年九月二一日付「京城日報」の戦災相談欄に寄せられたものである。在日朝鮮人が一九四五年八月一五日を「解放」と「光復」、「独立」として迎え、享受したというイメージを持つ人は、「平和な日本に再度行く心算で居ります」という意見には戸惑うかもしれない。

しかし、敗戦を「解放」として受け止められず、「日本人」の一人として泣きながら迎えた人は少なくないようである。詩人の金時鐘は「朝鮮人には「解放」であった年に私は十七歳だったのですが、（略）突然の「解放」に日本が負けたということが信じられなくて、私は一週間余りもほとんどご飯が喉を通らなかったくらい、打ちしおれていました。今に神風が吹いて、この「敗戦」はいっぺんにひっくり返るんだ、と自分に言い聞かすように信じていたのです」と当時の感想を述べている[-]。また、朝鮮文学研究家の李丞玉も「一九四五年八月、私は旧制中学四年生の人後におちない〈皇国少年〉であった。終戦は私にとっては祖国解放の喜ぶべき大転換でなければならないはずなのだが、〈日本人〉として泣いた一人でもあった。それほど私は日本の中にどっぷりと浸かっていた。それ以後のおよそ十年間は〈創氏改名〉による〈宮本〉という姓を守りつづける〈日本人〉であった。言葉づかいや生活の中から朝鮮人と見破られることはまずなかった。幼くして両親に死別した私は、日本人の中で育ってきたこともあって、私の中には朝鮮的匂いが全くなかったといってもよい。皮肉なことには、かの悪名高い〈外国人登録法〉が私の朝鮮人意識をかすかに支えている」と語っている[-]。

もちろん、私は八・一五を「解放」と「独立」として迎えた

在日朝鮮人が全く存在しないと言っているわけではない。ただ、私がここで確認しておきたいのは、「皇国臣民」から「朝鮮人」への変換は、さほど簡単なことではなく、むしろ「皇国臣民」への帰属を熱望する声さえも聞こえる場面が存在することである。

ところで、アメリカ占領軍及び戦後日本は、敗戦後の在日朝鮮人をどのように捉えたのであろうか。まず、アメリカ軍の上陸約二ヶ月後の一一月一日に出された「日本占領及び管理のための降伏後における初期の基本的指令」には、「在日朝鮮人」が以下のように規定されている。

> 中国人たる台湾人及び朝鮮人を、軍事上の安全の許す限り解放民族として取扱う。彼らは、この指令に使用されている「日本人」という語には含まれないが、彼らは日本臣民であったのであり、必要の場合には、貴官によって敵国人として取り扱われることができる。彼らは、もし希望するならば、貴官の定める規則によって送還されることができる。[3]

「解放民族」として扱うべきであるが、しかしかつては敵国の「臣民」であったゆえに、場合によっては「敵国人」として処遇し得るという、なんとも複雑で曖昧な説明である。

一方、在日朝鮮人についての戦後日本の認識は、幣原内閣成立五日目である一〇月一四日、「朝日新聞」紙上で記された関係当局の次のような方針から読み取ることができよう。

> 内地在住の朝鮮人、台湾人の選挙権はこれらの人々は国籍をこちらに有してをり、帰国するにしてもさう早急には完了せず、また内地に永住の希望をもつてゐる者も多数あるので、その選挙権は従来通り認めてゐて差支へない。

つまり、政府内閣は、解放民族である在日朝鮮人・台湾人にもこの時期においては参政権を認めようとしていたのであり、一〇月二〇日、臨時閣議に堀切内相が提出した内務省案および、同月二三日の閣議で承認された「衆議院議員選挙制度改正要綱」においても、その方針は変わりなかった（参政権付与の方針に急転換が生じたのは、改正法律案の立案が進展した一一月初旬である）。[4]

「外国人」ではない。しかし「日本人」でもない。「非日本人」でありながら、限りなく「日本人」に近い存在として在日朝鮮人を認識する傾向は少なくとも終戦後五年が経った一九五〇年まで続いていた。一九五〇年一月八日付の「朝日新聞」は、政府が「外国人事業活動政令」を実施するに際して、「外国人」から朝鮮人を除き、朝鮮人の事業活動は日本人と同様に取扱う」と発表したと伝えている。しかも、この記事において朝鮮人は「邦人」とも表記された。

一九四七年五月二日、「外国人登録令」が公布され、即日施行されるが、そこで在日朝鮮人は当分の間は外国人と規定され、外国人登録の国籍欄に「朝鮮」と記入されるようになった。つ

まり、法的制度の上において、在日朝鮮人は外国人として処遇されながら、しかし、一方では解放民族として認識されず「邦人」として扱われたのである。

以上、戦後の在日朝鮮人の帰属をめぐる言説の振り幅を確認してきたが、在日朝鮮人をめぐるこのような言説は、戦後日本におけるアメリカの影響や、戦後日本の国民意識の形成を論じる際、大きな示唆を与えるものだと考えられる。というのは、在日朝鮮人をめぐる言説がもつ振り幅は、日米関係の言説の振り幅と共鳴しあう関係にあるからである。

結論を先に言ってしまうと、戦後日本は在日朝鮮人を外国人、しかも「不法悪質な第三国人」としてみなし、在日朝鮮人を切り離し、否定することによって自らのアイデンティティを確立していく。特に、このプロセスには「悪の元凶」としての「北朝鮮系」在日朝鮮人の造形が必要であった。

アメリカ被占領以来、日本の政治理念や制度は大きく変化する。例えば、強力な軍の存在を肯定し、それによる対外侵略を認める国家から、戦争放棄を主張する国家へ、また、議会制民主主義を導入することによって、主権は天皇から国民へと移動した。つまり、戦後日本はアメリカと添い寝する形でスタートしたのである。その一端は、一九五〇年六月に起きた朝鮮戦争において、日本がアメリカの出撃基地、武器の生産地としてアメリカを援護するところからも現れている。そして、各メディアにおいては、「北朝鮮」を「悪の元凶」として前景化し、日本の平和と安全を脅かす存在として語るものが数多く登場する。これは、「不法悪質な第三国人」である在日朝鮮人、特に「北朝鮮系」在日朝鮮人を切り離し、否定することによって、戦後日本が自らのアイデンティティを確立していったことを意味する。

しかし、その一方で、占領下におかれた戦後日本の回復すべきナショナリズムの原型を、アジア諸国、特に中国や朝鮮に求める傾向もあった。一九五三年、文壇を中心に起こった国民文学論争はその一つであると言える。国民文学論争の筆頭者である竹内好が近代中国の民族抵抗史に注目、それを戦後日本のナショナリズムの座標としたのはよく知られたことである。そして、その竹内好によって、「健康なナショナリズム」を具現するための手段として「国民文学」が主張され、国民文学論争へと議論は拡散される。その最中、日本文学協会の一九五四年度大会において、「国民文学」の原型を在日朝鮮人文学者である金達寿の作品に求めていたことは、注意を喚起させることだと言えよう。

要するに、「朝鮮」及び在日朝鮮人をどう評価し、どう位置づけるかによって日米関係、ひいては日米と「朝鮮」の三者の関係は大幅に変化し、またそれは戦後日本の国民意識にも色濃く影を落とすと言えるのである。以下においては、その諸相について見ていきたい。

＊

一九五一年三月二一日、東京浅草の国際マーケットで、米兵

と在日朝鮮人が乱闘、米兵一人が死亡、在日朝鮮人四五人が留置される事件が起きた。事件発生の翌日、新聞各紙はそろってこの事件を取り上げる。

二二日付の「毎日新聞」は、「まだ正式の報告を受けていないので詳しいことは分らないが、かかる占領軍に対する暴行事件がひき起されたことははなはだ遺憾である。厳重に調査して関係者を徹底的に摘発したい。政府はすでに昨年末官房長官談をもって不法悪質な第三国人は法に照し断固処分するとともに本国に強制送還する方針を定め現在手続きを進めている」という大橋法務総裁談を掲載している。そして、この日の夕刊においては、「事件の直接の原因は、小さなことがキッカケとなったようだが、この一帯は北朝鮮系の色彩が強く、しかも廿日は台東会館事件の一周年に当るので反米的な意図からこんな事態を惹起したものと思う」との東京地検高橋検事の談話も合せて見うけられる。

米軍殺傷事件は、同年三月二三日付「読売新聞」においても、「かねてから付近の鮮人間には反米気運が濃厚だったと想像されるが（略）、（事件の）偶発的と計画的なるとを問わず国内治安確保の建前から不逞鮮人の本国送還の立法措置はこの際至急講ずることとする」と報じられており、同年三月二四日付「時事新報」も「今ここで問題にするのは、（略）、在日朝鮮人が集団的に居住し行動する場合に醞醸され易い反法的危険性についてである。（略）各地の朝鮮人集団居住地が斯くして、動もすれば大小犯罪者の巣窟として良民から危険視されたりまた共産党の地下組織に利用されて暴力革命の時限爆弾的役割を勤めるというようなことでは、日本国内に敵国を包含するに等しい。（略）日本国土に、こんな敵国的存在を許す余地はない。実行さえ可能ならば不良朝鮮人を残らず送還したい理由である」と伝えている。

ところで、「鮮人間」における「反米気運」と、日本政府が在日朝鮮人を「本国に強制送還する方針」を決めたことはどう連動するのであろうか。言い換えれば、在日朝鮮人の怒りの矛先はアメリカであり、そのような在日朝鮮人の反米機運をなぜ日本政府が牽制し、断固処分する必要があるのだろうか。

以上のような記述からは、「暴力革命の時限爆弾的役割を勤め」、「反米気運」を鼓舞させる「北朝鮮系」在日朝鮮人の反対側に、戦後日本とアメリカが布置されている構図が見て取れるが、このようなイデオロギー地図は答えの一つになるだろう。というのも、朝鮮人による占領軍暴行事件が起きる前年の一九五〇年六月二五日、朝鮮半島においては各々異なるイデオロギーをもつ南半分と北半分が、「祖国統一」というスローガンを掲げて戦った。この戦争において日本はアメリカの出撃基地・兵站基地・補給基地としての地政学的役割を担い、政治路線においてアメリカと足並みをそろえてきた。よって、在日朝鮮人の反米ムードは、アメリカのみならず、戦後日本への抵抗としても充分解釈され得るのである。

実際、朝鮮戦争中に発刊された「祖国防衛ニュース」（一九五一年二月五日）は、朝鮮戦争に際して「朝鮮に最初に上陸した師

団は日本にいたアメリカ占領軍であった」とし、戦争中に壊れたタンクや飛行機、大砲などの武器は再び日本の軍需工場へ送られ、修繕されているのみならず、三菱、日産、トヨタなどの企業からは多数の物資や労働力が動員されていると報じる。そして、アメリカは朝鮮戦争が長期化されるにつれ、米軍の肉弾となるべき軍隊を日本に求めているがために再軍備を計画したとし[5]、アメリカの戦争への加担を日本が手助けしていることを批判してやまない。

ところで、在日朝鮮人に「不法悪質な第三国人」、あるいは「敵国的存在」という修飾語がまとわりつくのは、この時期よりさらに遡る。

一九四九年九月八日、朝連解散により都内においては朝連系財産の接収が行われた。一九五〇年三月二〇日、台東区北松山町の台東会館が接収される時、同会館の接収を拒否した朝鮮人と警官が乱闘する事件が起きる。この事件は、一九四八年四月二五日、朝鮮人学校問題がきっかけとなり、神戸大阪市内に非常事態宣言にまで至らしめた「神戸教育闘争」に続く大きな騒擾事件として各メディアから取り上げられた。

ここでは、特に「時事新報」の報じ方に注目したいが、同新聞は三月二三日の社説において、「終戦後わが国の世相を不安にした原因の中に、不良朝鮮人の不法行動は見逃すべからざる一大要素である」と指摘した上、「不良朝鮮人の集団的暴動などによつて、秩序攪乱の目的を達し得ないことは、いよいよ明白になつた以上、在日朝鮮人間の正しき与論に基く自制自律により、不良分子の悪癖を事前に防止するに至らんことを望む所以である」と結ぶ。引用の部分からも分かるように、ここにおいては「不法行為」、「集団的暴行」、「秩序攪乱」、「不良分子」などの言葉が濾過されず、そのまま在日朝鮮人を表現する方法となっている。

しかし、ここでの「不良分子」とは必ずしも在日朝鮮人全般を意味するものではなかった。本文中には「いつも日本で乱暴するのは、共産党の支配する北朝鮮から筋を引く解散された朝連系の朝鮮人である場合が多いから、問題はなかなか簡単ではない」という文章も見られ、「不良分子」、「不良朝鮮人」とは「北朝鮮系」の在日朝鮮人を指している場合が多いと言える。

在日朝鮮人による不祥事と「北朝鮮系」在日朝鮮人とを直結させる言い方は他紙からも確認できる。見出しだけをあげても、「（騒擾事件）背後には北鮮系」（「朝日新聞」一九五一年二月八日）、「厚木で北鮮系朝鮮人騒ぐ」（「毎日新聞」一九五一年一一月二六日）、「大阪で旧朝連系騒ぐ　特需工場数ヵ所で暴行」（「毎日新聞」一九五一年一二月一七日）、「日本に潜る赤い朝鮮人　三万人のテロ団　日共と金日成が指令」（「読売新聞」一九五二年三月三〇日）、「（外国人）登録を拒む北鮮系　実力闘争を警戒」（「読売新聞」一九五二年一〇月八日）、「（外国人）登録拒否に政府は強腰　高まる北鮮系の大衆動員に対策」（「読売新聞」一九五二年一〇月二〇日）など、「北朝鮮系」在日朝鮮人が騒乱事件の元凶として語られる記事はほぼ連日各紙面を飾るといっても過言ではない。

このような文法は、戦後日本と韓国が友好的な関係をもち、

反共・反北を標榜する国として連帯していることを報じることによって、さらに実体的なものになっていく。

例えば、「時事新報」は一九五〇年一二月六日付の社説において、「既に南半の韓国においては、戦後の反日感情が昨年あたりから大いに緩和して、日鮮経済の提携が唱えられる形態となり、更に六月の動乱勃発により、日韓共同防共の必要が実証されて以来、その対日感情は全く一変したと伝えられる」と伝えた。また、この日の紙面には「韓国居留民団中央総本部では最近の朝鮮人騒擾事件について五日要旨つきの声明書を発表した。／外国に居住する者は不満がある場合でも常にその国の法律に従つて合法的に行動しなければならない、神戸騒擾事件など最近の朝鮮人による暴力行動はすべて日共にあやつられた旧朝連系の騒動で、韓国居留民団と全く関係ない、われわれはこんご全力を総動員して共産暴力と戦わねばならない」という内容も見られる。つまりこのような報道は、「北朝鮮系」在日朝鮮人を不安材料として強調しつつ、韓国と日本が反共・反北陣営をなしている構図をも提示する。

このようなイデオロギー地図は文学テキストにも連動した。例えば、田宮虎彦の「朝鮮ダリア」（「群像」一九五二年一月）には、かつて「私」の中学同級生であった呉炳均が、日本人による差別によって「ラジカルな反日思想」をもつようになり、結局「不逞鮮人」リストに名前があげられる状況が描かれている。

「朝鮮ダリア」の中には、「私」が朝鮮人の詩人洪聖秀に「君は北か南か」と問う場面がある。すると、洪聖秀はあの意味のない笑顔で、答えのかわりに首を左右に静かにふり、「今日も、また、詩をきいて下さいよ」と言いながら詩を詠みはじめる。この場面における「君は北か南か」が洪聖秀の出自を問うものであることは言うまでもない。「私」に出自を問われた洪は、答えのかわりにあの意味のない笑み（「あの意味のない笑顔」は本文中に「（呉炳均の）その笑いともいえぬ表情（略）は私へのへつらいである」と説明されている）をうかべるのみであったが、あの笑顔はいったい何を意味するのであろうか。

もちろん、「私」にしても洪聖秀にしても「北」を支持するか、それとも「南」を支持するか、政治的スタンスについては言明していない。仮に、洪聖秀が「南」に足場を置いていたとしても、「私」の質問に意味のない笑顔で答える可能性は否定できない。

しかし、住み込みの家庭教師をしていた菅井の家から追い出され、惨めな「不逞鮮人」という立場を再び確認させられた呉は、その原因が「私」が菅井の家に紹介したからだと思い、「私」に激しい憎しみを抱くようになった。「私」にも呉への尊敬に近い親密感はすでになくなっており、彼への蔑視は朝鮮人全体の蔑視と不信へとひろがっていた。だからこそ、同級生の松浦から呉炳均のことを聞いた時、「私」は「考えてみれば、何もあり得ないことではない」とし、昔、菅井の女主人が刑事が来て困る、不逞鮮人だといったことを思い出し、納得してしまう。つまり、「私」は手札型の一枚の写真を手がかりにして言う松浦の言葉を鵜呑みにしていた。

そこで、「不逞鮮人」が特に「北朝鮮系」在日朝鮮人を意味する場合が多いこと、それから「時事新報」が伝えるように戦後日本と韓国が共に「反共」と「反北」を標榜する国として表象されることが少なくないことを参照すると、「私」の問う「君は北か南か」には「不逞鮮人」か否かを選別しようとする視線のみならず、北朝鮮への警戒心をも含まれていたと言えるのである。このような「私」のモードを察知したからこそ、洪聖秀は「私」のきわどい質問にあの意味のない笑顔で答えたのではなかろうか。さらに、洪聖秀が政治的出自を「南」に置いていたとすれば、それを言明しても「私」との関係においてマイナス作用はしないはずである。つまり、「私」の質問に対する洪聖秀のあの意味のない笑みは、暗黙に「北」を意味するものだと推察できる。

さらに付け加えると、反日思想をもち、「不逞鮮人」の手配カードに名前があがっている呉炳均の出身が「北鮮咸鏡北道の城津生まれ」として設定されていることも偶然ではないと思われる。「南」の人間の中に反日思想を持つ者はいないと断言できないにもかかわらず、当時の新聞メディアなどが「不良分子」は全て「北朝鮮系」であるかのように報じる文法は、「朝鮮ダリア」における呉炳均の出自にも影響していると言えなくもないのである。

しかし、この時期の韓国情勢を参考すれば容易に分かることだが、反米・反日気運は決して「北朝鮮系」在日朝鮮人に限る問題ではなかった。例えば、一九四八年二月七日、韓国では単独選挙に反対して全国の労働者、農民、学生など二〇〇万人以上がストに突入し、九日には、数万人に達する検挙者と死傷者を出した。またこの年は、済州島民が単独選挙に反対する闘争を展開する中、島の人口約三〇万人のうち四分の一に該当する約八万人が虐殺される「四・三人民蜂起事件」が起きた年でもある。しかし、このような事件を伝える記事を新聞メディアから見つけるのははなはだ難しく、報じられていたとしてもその比率は「北朝鮮系」在日朝鮮人の騒擾事件記事より比較にならないほど低いと言える。

この時期、日本における民団の動きに目を向けると、一九四八年三月一二日、民団は朝連と共に栃木県の在日朝鮮人李順得殺人事件をめぐって共同闘争を展開し、また、同年四月二四日、先ほども言及した「神戸教育闘争」において「阪神地区教育事件対策委員会」を結成し、朝鮮人学校閉鎖令反対運動を展開したのであった。さらに、「産業経済新聞」（一九五一年一〇月二一日）によると、外国人登録切り替えをめぐっては、朝連のみならず民団も反対運動に参加していたという。要するに、反米気運や、いわゆる騒擾事件は何も「北朝鮮系」在日朝鮮人の専売特許でもないのである。

このように、戦後日本が制作したイデオロギー地図は以上にあげた韓国や、民団の政治的うねりを削除した上でなされたゆえ、「悪の元凶」としての北朝鮮像を簡単に見出すことが出来たと考えられる。自己というものが絶えず他者との関係の上で規定され、成立されるとすれば、戦後日本は在日朝鮮人、中で

も「北朝鮮系」在日朝鮮人を常に否定することによって、主体を獲得し、またアメリカの「民主主義」も自らのものにしていったと言えよう。そして、悪玉としての「北朝鮮系」在日朝鮮人は頻繁に新聞メディアに登場し、さらに日本共産党との関連も積極的に報じられるようになる。

例えば、一九五〇年一一月二七日の「日本経済新聞」は、「旧朝連系尖鋭分子を中心とする朝鮮人地下組織の存在についてはしばしばうわさされていたが、取締当局の確認するところとならず調査を続けていたが最近その組織、編成などの全容がようやく判明するに至った」とし、「朝鮮人地下組織」と日本共産党との関係を追及した内容を伝えている。それによると、「「在日朝鮮人青年工作隊」と称するこの地下組織に対し、日本共産党から八月末以来一、二回秘密指令が出ており、その中で工作隊員の大量養成といわゆる前衛としての訓練」が行われ、しかも「この工作隊の目的には列車妨害、基幹産業の破壊、日本にある連合軍要地のこう乱、要人暗殺などの暴力革命的企図もある」という。

また、一九五〇年一一月二七日、兵庫県の在日朝鮮人が神戸西神朝鮮人小学校に集まり、「祖国統一決起大会」を開いた後、長田区役所に向かって行進しはじめたところ、警官隊と衝突し、在日朝鮮人一九二名が検挙された事件に対しても、「読売新聞」は「明らかに日共の指導」の下で行われ、「事件の背後には日共の有力メンバーが含まれている」（一九五〇年一一月二八日）と報じる。「朝日新聞」も「大阪、京都での同様の動きと合せて日共および旧朝連の指令による関西での反権力闘争の一面であり、朝鮮動乱につながる国際的な色彩を持っていると警察当局はみている」（一九五〇年一一月二九日）と伝える。

特に、この事件は時期が時期であっただけに、朝鮮戦争と深く関連するものとして報じられた。事件発生一週間後、「朝日新聞」の場合、「これらの事件は朝鮮における戦局の緊迫と関連をもつものであり、地下組織の編成をほぼ終ったと伝えられる日本共産党が、いよいよ本格的な反米闘争、権力闘争にのり出したものであり、しかもそれは宣伝としての闘争の域を超えて、実力による暴力革命の実演の段階に入ったことを物語るものだという観測も出て来るのである」（一九五〇年一二月三日）と分析し、海の向こうの共産勢力と日本のそれとが共鳴しあう関係にあることを報じている。「読売新聞」も「われらは、これら朝鮮人の騒乱事件を、朝鮮において現に行われている戦争と、何らの関連なくして、なされたものとは思わない。（略）国連軍基地としての日本に、さらに社会不安を激成し、その基地としての機能をマヒさせることは、共産主義者に与えられた当面の任務だ。そして国連軍の不利な今が、その機会である。共産主義者は、機会の利用を知らぬほど、無能ではない」（一九五〇年一二月四日）とコメントを付けている。つまり、新聞各紙は、在日朝鮮人によるこれらの事件を、単に日本在住の朝鮮人が起こした騒擾事件としてみるのではなく、当時の朝鮮半島における東西の緊張した力関係がそのまま反映されたものとして解釈していた。

このような流れの中、在日朝鮮人の日本での政治活動も内政干渉の一環として解釈され、強く反対された。

一九五二年六月二七日の「読売新聞」は社説「左系朝鮮人に警告する」において、「およそ外国人が他国に在留するとき、在留国の主権の下に立ち、その政治、法律、社会制度を尊重すべきは当然である。（略）多衆結集―脅迫的態度により異議を主張するのは、いわば余計なおせっかいであり、明らかに内政干渉である。まして暴力によって警察関係官庁に正面から挑戦し、治安をみだすようなことは、もっての外というべきであろう」と、在日朝鮮人を日本から分別、「他国」に属する集団として見なし、そのような外国人による主張は「内政干渉」であることを言明している。

また、同じく「読売新聞」には、在日朝鮮人作家である張赫宙が「諸君のこのごろの暴力行為は日共の指令によるといわれるが、それ自体の善し悪しは別として何らの効果がない、「日本人民のため日本を解放する」という諸君の目的からすれば全く逆効果で、日本の人民は「朝鮮人は怖い」「朝鮮人がまた騒いだ」「他人の国で騒ぐのはもってのほかだ」といっている、その通りだ、諸君は日本人にとって「外国人」である、「日共」内部では「日鮮一体」であろうけれども一般日本人は「外国人」だと思っている、当然なことだ、外国人に政治干渉されたくないのが日本人の正直な気持ちだ」（一九五二年七月一五日）と述べた文章も掲載されている。

これらの記事に共通するものは、解放民族であるが、しかしかつての日本の「臣民」であったがために、場合によっては被支配民族として見なされてきた「第三国人」の在日朝鮮人が、もはや日本の政治とはまったく関係のない部外者として捉えられていることである。これは、戦後日本が抱えてきた少数異民族を完全に分離し、切り捨てることによって作為的に日本の境界を作り、自らの主体性を確保しようとした意図を感じさせるものであると言える。

以上を要約すると、戦後日本は在日朝鮮人を解放民族としてみなしながらも、敗戦直後の段階においては朝鮮人や台湾人にも参政権を認め、また「外国人」という概念には朝鮮人を排除し、むしろ「邦人」と表記するなど、「臣民」から解放民族への切り替えが難しいことを自ら露呈した。しかし、このような混合的な状況は、次第に整理されていく。それは、日本在留の少数民族との決別を宣言し、さらに「不良分子」、「暴力集団」、「犯罪集団」としての異民族、「北朝鮮系」の在日朝鮮人を浮き彫りにすることによって行われた。そして、メディアが認知したこのようなテキストは「北朝鮮系」在日朝鮮人の本質を語る正典として流通する。

時代は後になるが、松本清張の『北の詩人』（「中央公論」一九六二年一月～六三年三月）をめぐる評価は、「悪の元凶」としての北朝鮮言説がいかに根強いものであるかを窺わせる例だと指摘できる。

松本清張の『北の詩人』は、一九四五年一〇月、日本軍が撤退した以降、三八度線を境界として米ソの統治下に置かれる朝

鮮半島を背景に、共産主義芸術運動の指導者であり、詩人でもある林和がアメリカのスパイ活動に巻き込まれ、やがては北朝鮮の軍事法廷で死刑を言い渡される過程を描いたものである。韓国を統治するアメリカは、北朝鮮政権を破滅させるために、過去に「転向」の経験をもち、持病の結核をもつ林和に接近し、時には「転向」事実を暴露すると脅し、時には結核治療薬を提供しながらスパイ活動を強いた。林和は次第にアメリカの計画に巻き込まれ、北朝鮮にいながらアメリカ側に情報を提供することになる。しかし、林和は朝鮮戦争の休戦協定成立直後、北朝鮮の軍事法廷に被告として立たされ、死刑を言い渡される。つまりこの作品は、アメリカの謀略によって翻弄された詩人林和の悲劇的な人生を描いたものであると要約できる。

この小説には、林和をはじめ、朴憲永、李承燁など、各人物が実名で登場しており、一九四五年前後の朝鮮半島の歴史や韓国近代文学の思潮などと重なる部分が多い。また、作品の末尾には「一九五三年八月三日～六日の四日間にわたって、朝鮮民主主義人民共和国最高裁判所特別軍事法廷で行われた朴憲永＝李承燁グループに対する裁判記録（一部）」が掲載されているが、清張がこの裁判記録を土台にしていることは、小説を読むと明らかである。

しかし、朴憲永ら一二人の「アメリカスパイ事件」や作品の下敷きとなっている裁判記録をめぐっては、「いわゆる「スパイ事件」は、一握りの金日成一派を除いては大多数の朝鮮人は信用しない事件である。金日成一派はこの「事件」を真実のものであったように信じ込ませるために、その裁判記録といわれるものを朝鮮文のみならず、英文、中文、露文そして日本文などに翻訳して各国にばらまいた」[6]とする「真実の捏造」説があり、そのため「『北の詩人』の〝真実〟は、全く小説の内容と違うようである」[7]との批判の声も上がっている。

このような「真実の捏造」、「事実の歪曲」議論は、作品『北の詩人』の評価にも影を落としている。例えば、菊池昌典の場合、「『北の詩人』は、もちろんフィクションであり、作中の林和と、実在した林和とは別人である」[8]としており、大村益夫も「これはあくまでフィクションである。（略）『北の詩人』がフィクションである以上、実在の林和と小説の林和とは区別しなければならない。この作品が事実を歪曲するものだとする韓国での非難は、その意味で当たらないだろう」[9]と述べる。また、川村湊は『満州崩壊―「大東亜文学」と作家たち』の「林和別伝」の中で、「小説の素材や材料こそ松本清張は明らかに北朝鮮寄り（だった?）人物から提供されたのだろう」[10]とも推測している。

ここで、清張の『北の詩人』に対する韓国の反応についても触れておきたい。

一九五七年北朝鮮から韓国へ亡命した李喆周は、韓国の総合雑誌「思想界」に一九六三年七月から一九六五年四月まで「北韓の作家・芸術人」という連載物を書き、後に『北の芸術人』（啓蒙社　一九六七年一月一日）にまとめている。その中で氏は、執筆動機について次のように述べている。

> 共産主義の実生活を認識せず、その理論だけで共産主義を論じてはいけない。特にこの本を書くようになったのは、日本の推理小説の第一者である松本清張の『北の詩人』という実名小説を読んでからである。私は林和を含めた同時代における北朝鮮の多くの作家や芸術家の共同運命を同僚の立場で紹介しなければならないと思った。[11]

つまり、氏は林和をはじめとする北朝鮮の作家や芸術家たちの理解が曲解と誤謬に満ちているといい、それを解明することが執筆の目的であるとしている。本文の中で李喆周は多くの文人の生活や文学活動について語っているが、朴憲永、李承燁、林和などを刑場まで至らしめた経緯についても詳細に書いている。内容を簡単に紹介すると、朝鮮戦争が休戦会談（一九五二年）へ向かっていた時、北朝鮮出身の党員を含む世論は、南労党出身の朴憲永へ傾く。そこで、金日成一派は「思想検討会」というものを設け、朴憲永一派の思想を批判し、さらに粛清へ至らしめた。このような流れを紹介した後、李喆周は、「以上のような権力争いの内容を知らない松本清張は、金日成一派が捏造した公判記録にひたすら頼ったゆえ、事実を歪曲した形で「北の詩人」を書き、さらに良心の呵責も感じていないのである。もしも、松本清張が北朝鮮の共産党の内実や戦後の事情、そして共産党の生理を認識していたなら、このような作品は書かなかったのであろう」[12]とし、事件のでっち上げ、裁判記録の捏造、「事実」を歪曲した清張の作品などを批判する。

また、『北の詩人』は、韓国でも『北の詩人・林和』（キム・ビョンゴル訳　未来社　一九八七年九月一五日）というタイトルで翻訳されている。この訳本の最後にもやはり「この小説は歴史を背景にした上、実在した人物によって物語が展開されているが、あくまでも推理小説的なフィクションであるため、事実と異なる部分があることを断っておきたい」という注記が付されている。

ところで、清張の『北の詩人』が、日本においても、韓国においても「真実」か否か取りざたされ、北朝鮮寄りの人間から史料を提供されたのではないかという風評があるのはなぜだろうか。一つの事件をめぐって複数の視点や語りが存在することは当然のことである。そして、「歴史」が客観的な「真実」、「事実」のみを語る透明な文体を持つことは不可能であり、「歴史が過去の語りである以上、歴史家の著述と、歴史に取材した物語・小説の境界は、本来きわめてあいまい」[13]なものなのである。にもかかわらず、『北の詩人』をめぐる評価が「真実」であるか否かを中心に行われるのは何故だろうか。それはすでに構築された「不良分子」、「暴力集団」、「犯罪集団」としての北朝鮮のイメージがあまりにも根強く残っていて、別の視線で北朝鮮を眺めることが不可能なことになってしまっていたためではなかろうか。つまり、「不良分子」、「暴力集団」などの修飾語は北朝鮮に限るものであり、それはアメリカを筆頭とする「自由」・「民主」陣営とは全く関係のない事柄であることが動かぬ

前提となっているからであろう。日本と韓国が示すアレルギー反応は、「悪の元凶」としての北朝鮮言説がいかに根強く浸透しているかを物語る証左であると言える。

*

話を戦後日本における在日朝鮮人の分節過程に戻そう。

敗戦後、在日朝鮮人のみならず、戦後日本やGHQは、朝鮮人の「臣民」から解放民族への変換を容易く受け止められずにいた。解放民族でありながら「敵国人」でもあるという、宙吊りされた状態の在日朝鮮人は、新たなスタート地点に立った戦後日本における不安材料としてみなされた。そのような不安材料を切断する作業は、同時に健康な戦後日本の建設を意味するものでもある。

姜尚中が『ナショナリズム』のなかで言及しているように、日本在留の少数異民族との断絶を図り、「純粋日本」を構築しようとした戦後知識人には南原繁がいる。南原繁は「天長節―記念祝典における演述」（一九四六年四月二九日）の中で、次のように述べる。

> 日本国家権威の最高の表現、日本国民統合の象徴としての天皇制が永久に維持されるでありましょうし、また維持されなければなりませぬ。これはわが国の永い歴史において民族の統合を根源において支え来たったものであって、君主と人民のおのおのの世代の交替と、君主主義・人民主権の対立とを超えて、君民一体の日本民族共同体そのものの不変の本質であります。外地異種族の離れ去った純粋日本に立ち帰った今、これをしも失うならば日本民族の歴史的個性と精神の独立は消滅するでありましょう。[14]

これを踏まえて姜尚中は、南原がかつての「植民地「臣民」を「外地異種族」として国境の外に放逐することで、「純粋性」へと回帰する排他的な単一民族的なナショナル・アイデンティティ」を獲得していることを指摘した[15]。南原が「外地異種族」との決別を宣言し、新たな「純粋日本」への出発を宣言したことは、以上で述べたような状況と連動し、響きあうものであると言えよう。

さらに、朝連の強制解散や、朝鮮戦争の勃発、サンフランシスコ講和条約の締結、外国人登録法、出入国管理令など、様々な政治的波長は、絶対「民主」陣営と「不良分子」の「北朝鮮系」在日朝鮮人という図式を生んだ。そして、二つの勢力が拮抗する中、「不良分子」の「北朝鮮系」在日朝鮮人を絶えず否定しない限り、「民主」、「自由」は守られない状況は続く。もちろん、そのようなステレオタイプの北朝鮮像の造形には、民団や韓国側が示した反米・反日的動きを削除する必要があり、戦後日本と韓国が肩を組むポーズを前景化する必要もあったのであろう。つまり、「純粋日本」へ立ち返る試みと、そして「民主」と「自由」を標榜する国作りへの踏み台は、在日朝鮮人、特に「北朝鮮系」在日朝鮮人を否定し、彼らを戦後日本から分

節する作業によって準備されたものであると言える。そして、このようなイデオロギー地図は、文学テキストにも反映され、さらに、作品の評価までも定めてしまうことになりかねなかったことについてはすでに述べたとおりである。

本稿は、戦後の日米関係に「朝鮮」および在日朝鮮人を介在させた場合、その関係はどのように表象されるのかについて考察することを目的としたものであった。(上)においては、戦後日本が描いたイデオロギー地図が一方的に「北朝鮮系」在日朝鮮人を否定することによって仕立てられた構築物であることを指摘した。(下)においては、「朝鮮」及び在日朝鮮人の民族主義や、ナショナリズムに戦後日本が連帯することによって、全く異なるイデオロギー地図を提示し、異なる日米関係を描く過程について考察していきたい。

【注記】

1 金時鐘『「在日」のはざまで』立風書房 一九八六年五月三一日 三三頁

2 金一勉『朝鮮人がなぜ「日本名」を名のるのか』三一書房 一九七八年五月一五日 七七頁

3 辻清明編『資料・戦後二十年史』日本評論社 一九六六年八月一五日 二二頁

4 松田利彦『戦前期の在日朝鮮人と参政権』(明石書店 一九九五年四月一〇日)の「在日朝鮮人の参政権の剥奪」参照。

5 朴慶植『在日朝鮮人関係資料集成 戦後編(八)』不二出版 二〇〇一年二月二三日 二九一頁

6 林英樹「「北の詩人」の真実」(「自由」一九六七年一二月一八二頁)

7 林健彦『韓国現代史』至誠堂 一九六七年一〇月三〇日 一二〇頁

8 中公文庫『北の詩人』中央公論社 一九七四年二月一〇日 三四一頁

9 角川文庫『北の詩人』角川書店 一九八三年六月一〇日 三四六頁

10 川村湊『満州崩壊―「大東亜文学」と作家たち』文芸春秋 一九九七年八月三〇日 一七八頁

11 李喆周『北の芸術人』啓蒙社 一九六七年一月一日 五頁(翻訳は引用者による)

12 注11に同じ。一四〇頁

13 兵藤裕己「歴史叙述の近代とフィクション」(『岩波講座9 文学 フィクションか歴史か』岩波書店 二〇〇二年九月二〇日 一頁)

14 『南原繁著作集 第七巻』岩波書店 一九七八年二月一八日 五八頁

15 姜尚中『ナショナリズム』岩波書店 二〇〇一年一〇月二六日 一一三頁

(九州大学大学院博士後期課程三年)